



## 『東南アジア人口民族誌』\*

坪内良博 著

### *Ethnodemography in Southeast Asia*\*

by Yoshihiro Tsubouchi

---

## 人口分析の側面

小林和正\*\*

### Demographic Analysis

Kazumasa KOBAYASHI\*\*

This book, written in Japanese, was compiled from a series of the author's published papers on population in nineteenth-century Southeast Asia. It consists of seven chapters. The Smallness of Population in Southeast Asia; Population Growth; Births and Deaths; Colonization and Settling Down; Cities and Migrants; Sparse Population Distribution and Small States; and Continuity and Discontinuity. Tsubouchi presents a demographic examination of information related directly or indirectly to population growth from different parts of Southeast Asia, including remote villages and major cities. Besides evaluating the classical data on population collected by Raffles for all Java and by Crawford

for Yogyakarta, both during the 1810s, he develops interesting demographic interpretations of genealogy, changing patterns of agricultural land use, colonization of river deltas, urban ethnic compositions, and others. The main theme of the book is the various steps toward population growth in the region during the last century, starting the generally sparsely populated situations of the early period. The author's central interest seems to lie in understanding the fundamental characteristics of population growth in premodern Southeast Asia. And his book has successfully built up a basis for future research in this field.

---

\* 1986. 勁草書房. 197ページ. 表23. 図15.

\*\* 日本大学人口研究所; Nihon University Popu-

---

lation Research Institute, 1-3-2 Misaki-cho, Chiyoda-ku, Tokyo 101, Japan

## I

本書（勁草書房，1986年刊）については既に北原〔1986〕，清水〔1986〕，鈴木〔1986〕の3氏による書評があり，本稿執筆にあたり，それらを参照できるのは幸いである。北原の書評は7ページにわたる詳細なもので，これには著者からの応答も併載されている。他の二つは掲載誌の編集上紙面は限られているが，その短評のなかで，清水は人口研究の人口誌的であることの意義について論じ，鈴木は全体像へと肉薄して行く著者の一貫した姿勢をとらえている。これら3氏の論評せられたこと以上に，本稿で筆者が何を新たに貢献しうるのか自信はないが，本書で論じられていることの人口学的側面に，与えられた紙面を利用して，もう少し光を当ててみようとするのが，本稿執筆の動機である。

著者の述べるところによれば，東南アジアは19世紀初頭には全般的にまだ疎に分布する小人口状況下にあった。それが特に今世紀に入って今日の大人口をもたらすような急速な人口増加をみせた。東南アジアの過去の小人口状況から出発して今日の大人口に結びつけて行く研究のための一応の時代区分として，19世紀以前，19世紀，20世紀前半，それ以降今日まで，の4区分を著者は考え，本書はその時代的焦点を19世紀に合わせている。本書は，著しく低い人口密度を原構造とした東南アジア人口の19世紀における増加への歩みを論じているなかなか野心的な本である。単行書，本誌，その他の専門誌等に発表された著者のこれまでの関連論文を基礎にしながら，新規の研究を加え，一書としての統一的編成のもとに成ったものである。

本論に入る前に，本書の内容の概略を紹介しておくのが，踏むべき順序であると思うが，幸い既に北原による書評のなかで丁寧な

紹介がなされているので，以下には，7章からなる本書の各章の標題を掲げるだけにとどめておきたい。各章標題：I 小人口世界の構造（pp. 1-24），II 人口増加のしくみ（pp. 25-42），III 出生と死亡（pp. 43-81），IV 開拓と定住（pp. 82-123），V 都市と移民（pp. 124-160），VI 疎人口分布と小国家（pp. 161-173），VII 連続と非連続（pp. 174-191）。

マッケベディとジョーンズ推計による東南アジア全域人口の大きさの17世紀以降の推移（pp. 1-5）をはじめ，18世紀末から19世紀中頃にかけてのいくつかの時点について英人使節たちが推計しているビルマ全土の人口（pp. 20-24），19世紀初期からのジャワ島総人口の推移（pp. 26-33）などを論じている章IからIIの前半にかけての部分とすれば，本書における実体人口の論議は，直接には，すべて局地的な人口についてのもので，それは書名のなかの『人口誌』にふさわしいものである。しかし，事例的に取り上げられるその地域は，東南アジア内の広い範囲に及んでおり，あくまで東南アジア世界を意識した展望的な労作である。本書でも紹介されているが（pp. 51-54），東南アジアに関するいわゆる歴史人口学的研究には，フィリピンにおける教会資料に基づくスミスの研究や北スマトラ地域におけるドイツ系の教会の資料によるキャッスルズの研究などがあるが，本書は，そのような特定人口についての人口学的諸局面の体系的な研究を特に主題にしたものとは，狙いを異にしている。

## II

ラッフルズによるジャワ島全人口462万人（うち土着民人口450万人）という数については，ミュルダールなどこれをそのまま受け入れた立場はいうまでもなく，数え落としのあることを想定するなど信頼性に疑問を表明し

て補正值を与えたペーペルにしても、このラッフルズのデータの内的整合性の問題に注意を払ってはいない。本書の章Ⅱ節1「増加率の実態」に展開される著者自身による内的整合性の吟味 (pp. 27-30) は、このラッフルズの人口データの研究史上画期的な貢献である。細心の注意をはらった精緻な吟味であり、これによって、著者は、ラッフルズのセンサスにおける村の数、村内世帯数、世帯内成員数等の各面での調査対象の把握の仕方の不完全性を指摘している。いままでの研究者らが、当時の外的条件などから間接的にのみそれを想定したのとは、根拠を異にする人口学的接近法である。ついでに著者は、ラッフルズがジャワ島人口総数を計上していく過程での集計上の一部の不合理性をも発見しており、それだけでも全人口において11万人余の過小計算になっていることを述べている。以上節1は、過去の人口増加率を論ずるのに公的人口統計を使用して過去の人口増加率を論ずることの困難さを例示したもので、人口増加率の実際については次節2「系譜にみる人口増加」で例示される。

東南アジアの大部分である非キリスト教徒の地域についての人口分析は、前述のスミスやキャッスルズのキリスト教徒に関する歴史人口学的接近とは異なる（おそらくもっと資料条件の悪い）方法を用いねばならない。そこで取り上げられるのが系譜資料に基づく人口増加率の推定の試みである。南スマトラ州での著者によるフィールド調査でランボン系および山地マレー系住民の系譜記録が入手された。その系図のもつ基本的性質の確認や利用上の基礎的整理（系譜記載人名からの性別の判定を含む）など、人口増加率推定作業以前の労の方がむしろ少なからぬものがあつたようである。人口増加率の推定方法自体は、その説明を読んでみれば比較的簡単であることが分かるが、初めて著者によって着想され

たことは高く評価されなければならない。詳細は本書にゆずるが、推定結果として示された人口増加率は受け入れ難いようなレベルのものではない。<sup>1)</sup> 著者は同様の系図がほかの地域にも存在するという情報を記している (p. 41) のは希望を与えるものであり、今後それらの系図からの推定値も追加されて行けば、今回の試みもその意義を増して行くことになるであろう。しかし、系譜資料が上記の南スマトラのような性質のものである限り、その増加率を出生率と死亡率へと要素分解して説明する可能性は、制約を受けたままとなる。増加率の人口学的分析は別の性質のデータに頼らなければならない。それが次の話である。

前述のスミスおよびキャッスルズはその歴史人口学的研究で、時系列的な洗礼率と埋葬率（死亡率）を算定しているが (pp. 51-54)、著者は、クローフードの調査による人口データを利用して人口動態率などの推計を試みた。一つは、クローフードが1815年頃サルタン領ジョクジャカルタで、141人の年とった婦人から聞きとりして得た生涯出生児数と結婚適齢期までの死亡率のデータ（19世紀初期にすでにこのような近代的感覚の人口学的調査を試みているとは注目すべきことである）から、モデル生命表ならびにモデル安定人口表を用いて行なった人口動態率の推計である。その結果では高出生・高死亡・低増加の率パターンを得ている (pp. 46-48)。そしてさらに、その人口動態率を用い、それよりモデル安定人口を誘導し、その年齢構成を求

1) カンボン・スラウィの例での別計算であるが、観察数の小なる第9-10世代の息子／父（12／4）は除外し、第13-14世代はその世代間期間が一部20世紀にかかっていると考えられるので、これも除き、第10-13世代（19世紀の大部分を占めるのではないであろうか）について年平均増加率（第2の方法、幾何平均、1世代30年）を求めると、1.69%を示す。

め、別にやはりクロファードによって示されているジョクジャカルタ人口の年齢構成と比較し、両者の間の合致度が高いことを確かめている(p.48)。著者によるこのジョクジャカルタ人口についてのモデル推計増加率は、著者がいくつかの方法で試してみても、年率0.2-0.5%あたりの範囲に見いだされた。ところで、この推計値がかかわるべき時点は、その基礎データからいって、1815年以前の1世代間くらいとみなしてよいであろう。本書は、19世紀初頭東南アジアではまだ疎に分布する小人口状況が一般的であったという前提から出発している。このことは、18世紀末～19世紀初頭あたりまでは、東南アジアでは一般に人口の増加がまだ極めて低率であったということの意味しよう。その意味では、上記ジョクジャカルタに関する人口増加率の推計値は、単なる一地域の例には過ぎないが、単純に言えば抵抗なく受け入れられるようなレベルのものである。

ところで、クロファードは、このほかに、1815～16年にまたがる1年間についてジョクジャカルタの町および周辺農村についての人口動態の数字を提供しており、それから求められる当該地域全域の年人口増加率は2.4%もの高率になる。著者はこの極端なちがいを検討し、三つの推論を示して(p.49)、一つに絞った結論は避けている。紙面の都合上著者の推論の紹介は省略するが、上記の比較的高い増加率は、著者の記す人口1,000人対41.6の出生率と17.1の死亡率との差であって、人口1,000人対17という当時としてはかなり低い死亡率の存在に相当注目せざるを得ないと考えるのは、筆者も著者と同じである。この死亡率に対比して、モデル推計から得られた前述の低増加率を決めている死亡率は、人口1,000人対51ないし59という頗る高率のものである。推計がこのような高死亡率に結果したことについては、著者が述べるご

とく、推計のためのモデル生命表の選択にかかわる基礎データに問題がある可能性が高いのであろう。

インドネシアは今日でも確かな死亡率水準の不明な国であるが、諸種の推計値を勘案して1960年頃でもまだ人口1,000人対25あたりの高さにあったようである。時代・地域を巨視的に眺めれば、死亡率も安定性が高まろうが、特に今世紀以前の局地的小人口に関する死亡率においては、年々の変動や地域的差異に大きいバラツキが生ずる可能性も高いであろう。著者は本書のなかで、死亡率に関する各地の情報について出来る限りの比較を怠っておらず、また、「多病地と多病年」(pp.54-70)という節のなかで、死亡率の不規則変動を19世紀東南アジアについて展望しているのは、大へん参考になる。

上記の死亡率を課題とした部分からはとび離れるが、本書の終末の節で、著者は「フロンティアにおいてはマラリアが人命を奪い、人口密集がはじまった植民都市にはコレラなどの襲来が多大な影響を与えているが、これらの現象は、大量の移民をむかえた地域や時期と重なっている部分が多いので、土着人口がこれらによって影響された様相は、若干限定して考える必要がある」(p.186)と述べている。土着者と来住者との間のかかる死亡率差の問題は、大変興味あるべき今後の研究課題であって、啓発される示唆である。

以上は章Ⅲまでに関するものである。以上の部分で受けた一つの印象は、章ⅡとⅢとは本書全体のなかでどうも収まり具合がよくないような気がするということである。章Ⅳ以降との間にギャップが感じられる。本書の終末章の結論部分に対する貢献度もささやかである。技術的部分の多くは注に移し、人口学的ダイナミックスの諸相は、どのようなところに目をつけてとらえていったらよいのか、という平易な解説に導かれた形の論議にでも

編成されていれば、とにかく読み通すのに忍耐力を要するような人口学的記述も、好奇心を誘発できる読物になるのではないかと、人口研究者の一人である筆者も真剣に考える次第である。

### III

章IV以降については社会学的立場から北原によって特に詳しく紹介かつ論評されているが、ひきつづき人口学的観点から感じたことを述べさせていただく。

「人口増加が生ずれば、土地の余裕のある限り開拓地への移動がおこなわれてきた」(p. 82) という書き出しに始まる章IV「開拓と移住」は、これを冒頭の章に置いて本書を始まらせても、特色ある一書になるのではないかと想像させるほど、本書にとって重要な章であると思われる。この章の中心部分は、南スマトラのコムリン川流域における著者のフィールド調査の成果であり、それだけに迫力もある。事例調査の記述のあとのまとめで、著者は、例えば非利用地への進出とその結果としての連作化など、土地利用形態の変化を人口増加からどの程度説明出来るかの問題にふれている。しかし、この問題について早急な答えを試みていないのはむしろ歓迎できる。著者はそのフィールド・ノートから、土地利用と人口増加との間の複雑微妙な関係の実態を素描している。人口の自然増加が土地利用形態の変化の契機や原因であるとみなされてよい場合でも、人口学としては、そもそもその人口増加が生起した原因は何であるかの究明が要求されるであろう。前記の章IVの冒頭の書き出し「人口増加が生ずれば、…」は、最初に何の原因もなしに人口増加が起こったことを意味している訳では決してないが、その人口増加の正体をさぐろうとするのが人口学でもある訳である。人口の自然増

加は、生起するのが当たりまえで説明の必要のない現象ではない。この問題に対する著者の関心は、次の章IV節3「デルタの開発と定住」(pp. 115-123)の論議のなかに反映されている。下ビルマ・デルタやメコン・デルタの開発中期以降において水田面積拡張の主因とみなされる当該地域人口の自然増加(人口1,000人対20程度とみなされる)が可能であるための出生率・死亡率のレベルの問題に言及しているのがそれである。そこでは、「マラリアの猖獗が伝えられるデルタ地域で、平均死亡率がこのレベルにとどまることが可能であったのかどうか」(p. 120)その他、今後このこされた研究課題が数多くあることを気付かせてくれる。

「域内の人口が一定の増加率さえ保有すれば、若干の外部移民を加えつつも、これをもまた自己増殖の源としてとり込み、主として自己膨張によってデルタをうめつくすことが可能であった」、そして「穀倉として成立していく地域であるから、食料供給は十分であり、乳幼児死亡や伝染病さえ顕著でなければ、増殖は幾何級数的になり得たのである」(p. 123)という叙述は三つのことを考えさせる。一つは、このような人口発展を描く人口学的モデル・シミュレーションがいつの日にか試みられないかという夢である。もう一つは、文章表現の問題でもあろうが、人口増殖に有利な条件(「人口が一定の増加率さえ保有すれば」、「乳幼児死亡や伝染病さえ顕著でなければ」)が仮定されているので、この論議は少し当然の感を与えないでもないということであり、最後は、反対に開拓の難航等でそういう条件に恵まれなかった事例はどのくらいあったのだろうかということである。失敗して人口が撤退・消滅してしまったようなケースは、後世に順調な開発の成果を遺す成功例に比べれば、その復元ははるかに困難なものであろう。この問題は将来の研究課題に

なりうるものであろうか。もっとも、観察する時間的スケール如何の問題もあるわけで、前述の著者のことばは一時的な撤退・停滞をも内包した巨視的な増殖過程を意味していると受け取るのが適切のようでもある。

あと章V<sup>2)</sup>およびVIについては割愛し、終末章VIIにとびたい。この章で著者は一つの大変興味ある今後の研究課題を提起している。それは「ジャワ島の一九八〇年における一平方kmあたり六九〇人の人口密度が過去の小人口時代の傾向の残存結果としての意味を有するのかどうか」(p. 176)という問題である。これが記されている部分からは離れるが、最後の節で「出生力の自由放置」(p. 190)ということが、東南アジアの慣習的人口行動パターンの把握において基底的意义を有することが論じられる。上記の課題もこれと離れ難く結びついているのであろう。この結論的部分の節は「人口現象と文化のかかわり」と題されている。欲をいえばこの部分こそ本論(た

とえば章IV「開拓と定住」)において、そこにおける論議と統合させた形で扱った方が、著者の論理を明解ならしめる上で一層効果があったのではないかと想像する。

本書の根底を流れる著者の理念は、人口学的にいえば、「自由放置」された出生力ではあるまいかとさえ思う。この「自由放置」された如何なるレベルの“自然出生力”が如何なるパターンの死亡率と均衡して、東南アジアにおいてはごく近い過去まで小人口状況が保たれてきたのかという(本書では議論の機会の与えられなかった)課題について、論議の機会の熟することが切に期待される。

最後に、本書をとおしての19世紀東南アジアに関する人口学的知見の進歩に対する著者の貢献は、まことに大きいものがあると感じる人口研究者は筆者のみではないであろう。

#### 参 考 文 献

- 北原 淳. 1986. 「坪内良博著『東南アジア人口民族誌』」『ソシオロジ』31(2): 107-113.  
 清水浩昭. 1986. 「坪内良博著『東南アジア人口民族誌』」『人口問題研究』179: 71.  
 鈴木継美. 1986. 「坪内良博著『東南アジア人口民族誌』」『人口学研究』9(9): 91-92.  
 坪内良博. 1986. 「書評に答えて」『ソシオロジ』31(2): 113-114.

2) シンガポールのヨーロッパ人人口は1850年に360人(p. 131)とあるから、これと1844-65年の20年間の死亡数305人とから年平均人口1,000人対42ほどの死亡率が得られ、ひどく受け入れ難いレベルのものではない。19世紀中頃についての著者推計の描く人口ピラミッドを基本的に不変とみなすための傍証はどのくらい集められるであろうか。